

曹洞宗における宗派図について

駒ヶ嶺 法子

一 はじめに

禅宗史研究において嗣法関係は重要視されており、その嗣法関係を示すために著された法灯の系譜は、不可欠の研究対象である。

法灯の系譜について、玉村竹二氏は、著書『日本禅宗史論集』下之一（思文閣出版 一九七九年）の中で、

禅宗門内に於て、禅僧を語るとき時に、如何にその嗣法の事が大問題であるかは、語録・詩文集等に就て之を検すれば、直ちに領解し得る所であつて、是等の記録より知り得る事實の過半は法系に関する事である。

と述べている。そして、菅原昭英氏は「禅戒血脈と栄西」『文化史の構想』（大隈和雄編 吉川弘文館 二〇〇三年）の中で、

禅宗の歴史を捉える上で、法灯の系譜は、古来重んじられている。そして中国の初期禅宗史の本格的な研究は、その史実性を問い直し、法系譜の形成過程に注目することで、禅宗史の基本的

な認識を一変させた。一二世紀以後の日本の禅宗史においても、法系譜の解明は重要なテーマであり、その上に禅宗史像・禅宗教団史像が築かれてきた。

このように重要視される系譜は、時代を通して自派の由来を示すため個々人の間に伝授される一方、祖師を頂点に枝葉の如く末広がり型に構成された、公開性のある系譜も編まれている。本稿では、後者に属する永平下の系譜を考察の対象とする。

現在筆者は、徳翁良高（一六四九～一七〇九）の著作を研究対象としており、その一つに『日域洞上宗派図』（一六九七成立）がある。十七世紀の曹洞宗は伽藍法と人法が混在する時代であり、この宗派図が宗統復古以前に編纂されていることから、徳翁の嗣法観が窺えることに期待し検討した。しかし、史料の位置付けを行うためにも近世における系譜史料の考察が必要であると感じ、本論文のテーマに取り組んだ。『禅籍目録』、『曹洞宗全書』「解題・索引」、『曹洞宗文化

財調査目録解題集』1～6（曹洞宗文化財調査委員会編 曹洞宗宗務庁、以下『解題集』と省略する）、『曹洞宗全書会報』第十二号（一九三四年）、玉村竹二著『日本禅宗史論集』を元に系譜史料を集め表にした。（【資料】参照）編纂年代の明らかな系譜史料をみると、十七世紀中頃から、末広がり型の系図が確認できる。このような史料は、その編纂過程からすれば信憑性は低いものの、永平下全体を示そうとする法系譜が作成された時期、その背景、意義においても、興味深い史料である。また、編者、編集年、書写年が判明している系図は、その編者による当時の認識と考えられ、その時代に収集した情報としても注目できる。中でも、竹峰広嫩撰『達磨大師宗派次第』³（以下『宗派次第』と略す）の収録人数は、同時代の史料の中でも群を抜いている。『宗派次第』の序分に、「これ以前には広編の図を見ない」とあり、また、徳翁良高編『日域洞上宗派図』、嶺南秀恕（一六七五～一七五二）編『日本洞上宗派図』（以下『洞上宗派図』と略す）では『宗派次第』を先行史料として挙げているほどである。⁴

なお、表題に「宗派図」という語句を掲げたが、これは史料内容からみて「法系譜」・「法系図」と同じ内容である。それでも「宗派図」という用語を用いたのは、十七世紀～十八世紀に作成された史料標題に「宗派」の語句が多くみられ、この頃の系図が「宗派図」と表されることに一つの特徴があ

ると考えたからである。

二 宗派図についての先行研究

宗派図について、次のような先行研究があるが、この中で、特に注目したのは、大久保道舟氏と玉村竹二氏の研究である。

- ・ 栗山泰音著『嶽山史論』（鴻盟社 一九二一年）
- ・ 大久保道舟著「曹洞宗大系譜の編輯を終へて」

（『曹洞宗全書』会報第十二号（一九三四年五月））

- ・ 同『曹洞宗大系譜』（一九三四年）

- ・ 岡田宜法著『日本禅籍史論』

（国書刊行会 一九七二年復刻（一九四三年））

- ・ 高橋全隆著「曹洞宗大系譜雑感」

（『宗学研究』第十九号 一九七七年）

- ・ 玉村竹二著『日本禅宗史論集』（思文閣出版 一九七九年）

- ・ 菅原昭英氏「禅戒血脈と栄西」

（『文化史の構想』大隈和雄編 吉川弘文館 二〇〇三年）

大久保氏は「曹洞宗大系譜の編輯を終へて」の中で宗派図史料を多数取り上げ、次のように述べている。

由来法系の編輯は徳川時代以降、心ある一部の人々によって行われ来たが、其の多くは各自所属の法系を中心に纏められたものが多く、宗門全体の法系を蒐集したものに至って稀である。

今一二を挙げれば、『日本洞上宗派図』『日本洞上枝派図』『日本曹洞略宗派図』等はその代表的なものである。就中『日本洞上宗派図』以外は可なり誤診があつて無条件に信ずることの出来ないものである。但し、『日本洞上宗派図』と雖も編輯の中心が伽藍法に重きを置いているので、人法を知らんとする者には可なり大きな不便がある。しかし、徳川時代の作物としては、実に立派なもので、宗門嗣法史上没すべからざる功績であるといはねばならぬ。尚前に述べた或特定の人に属する宗派図といえ、無着下の『弘化系譜伝』、卍山下の『鷹峰聯芳系譜』等がもつとも著名である。何れも誤診のある点に於ては五十歩百歩であるが、併し『弘化系譜伝』にいたつては特に人法・伽藍法が混雑して、その何れを真とすべきや判断に苦しむ状態である。かくの如くであるから、系譜を編輯するに當つても、是等の材料を、その儘使用することは、非常な危険が伴うものである。故に一応系譜の内容・性質や、その成立するに至つた経緯などを能く吟味してかからねばならぬ。

大久保氏も指摘しているように、系譜史料を用いる場合は、編纂背景、その内容や性質の吟味が重要である。

また、大久保氏が手がけた『曹洞宗大系譜』は、『曹洞宗全書』『大系譜』（一九七六年）の先駆けとなる。

玉村氏は、『日本禅宗史論集』下之一の「臨済宗の宗派図各説」で臨済宗を中心に宗派図を集め、解説をしており、そ

の結語で宗派図についての見解を示しておられる。その要旨は次のようにまとめられる。

(1) 宗派図の出現

五代、北宋において達磨相承を強調しなければならなかったことから、『祖堂集』、『傳法正宗記』、『五燈録』、『景德傳燈録』、『天聖廣燈録』、『建中靖國續燈録』、『聯燈會要』、『嘉泰普燈録』が選述され、次に考え出されたのが、端的に法伝の系統を図示することであり、「宗派図」の出現となる。南宋から元にかけて多く編纂された。

(2) 日本への伝来

中国での宗派図は日本にも影響し、南北朝・室町前期にかけていろいろの立場による宗派図の編集が行われた。

(3) 日本での宗派図編纂

江戸時代に入り、総合宗派図よりは、各宗派別の宗派図が選述され、大部分が刊行されている。これは、茶道の興隆により、禅林墨蹟鑑賞のために筆者の法系を知ることが必須条件であつたことにも依る。

(4) 各門派別の宗派図に移行した理由

一寺院を一派が独占するような門徒門派のまとまりが明確になつたので、その門派毎にその相承関係を明示する必要があつたのであろう。

江戸幕府の対寺院対策で、「継目」を明示する必要がある、

法系相承を幕府へ報告しなければ一寺の住職の資格を授与されなかったため、各派別に宗派図が作成されたのだろう。

宗派図の編者は、本山局の依頼または命令によって編纂する場合が多かった。そして、その法系はいずれも伽藍法であったので、臨済宗内に発生した印証系の法系はこれらの宗派図には表現されていないのは特質といえる。

以上の先行研究からわかるように、曹洞宗における宗派図の研究について玉村氏のような研究は、ほとんどなされていない。そこで、史料検討を行う際には、玉村氏の見解を踏まえての考察も試みる。

三 宗派図史料の検討

三一― 史料検討の方法と意義

先に述べた通り、管見の及ぶ限り多くの系譜史料を集め表にまとめた結果、収集した史料群の中では『宗派次第』が比較的初期に編纂され、かつ大規模な系図であることが分かった。そこで、検討可能な寺院に限り、この『宗派次第』と、江戸期において最も規模の大きい嶺南編『洞上宗派図』と比較考察し、玉村氏の見解に沿った考察も試みる。ここでは、その比較結果である個々の異同の表示を割愛し、概要を述べるとどまる。また、個々人の行状等も割愛した。なお、史

料の性質上、その信憑性を問われることから、内容真偽の検討を目的としない。あくまでも、当時の情報性、および編纂者、書写者の観点を検討することを目的とする。

三一― 各史料について

① 『宗門之略宗派』

長興寺（長野県塩尻市）所蔵 一卷一帖（折本）
『宗門之略宗派』は、『曹洞宗報』で報告され、解説が付されている。この史料は、過去七仏から始まり西天祖師が記載されており、「初祖達磨大師」を起点とする中国部五家の系図を記載している。中国部の末尾には、長興寺開山才応総芸（一五六〇寂）の誌記があり、二元龜^{二五七〇}三壬申五月青松山長興金室置焉圭巖叟⁸の識語がある。

中国部の後に、「永平道元」を起点とした一五九名が収録されており、快叟（一五七八寂）を下限に記載している。また、系図中に加筆と判断できる箇所があり、心月寺開山桃庵から同七世、総芸から長興寺九世天桂三、長久寺四世永広まで記載されている。才応総芸の示寂年が一五六〇寂であり、その後の長興寺九世天桂三、長久寺四世永広が記載されていることから、才応総芸の示寂後に書き足されたことも考えられる。

卷末識語には、「前総持長興十一世体岩柏全代改之置什物

也 尽未来際不可出當山者也 元禄九丁未五月十七日」とあり、改修されたことがわかる。

② 竹峰広嫩撰『達磨大師宗派次第』

毛呂大和氏所蔵 一卷二冊

『達磨大師宗派次第』は、福井県義宣寺の六世、竹峰広嫩^②編纂の法系図である。表紙に「達磨大師宗派次第」とあり、第一冊が三三丁、第二冊が三六丁である。始めに菩提達磨から始まる中国禅宗史の概要が記されており、「永平道元禅師」から始まる三五三〇人の祖師を収録しており、全てではないが、開創寺院や、世代数も書かれている。下限の祖師の示寂年を調べると、少なくとも十七世紀中頃までの祖師を収録していることがわかった。その示寂年を次に示す。

月洲尊海 (一六八三)	福州光智 (二六六四)
門室觀三 (貫龍) (二六五九)	英峻 (二六七四)
帰雲守光 (二五三八)	智海宗徹 (二四九四)
龍泰 (二五四五)	洞谷泉竜 (二六一四)
珊嶺諸 (一六二二)	高岩薫道 (二六五六)
愚明祥察 (二六七〇)	天室聚紋 (二六五五)
中華 (二六六三)	花岳宗藝 (二六六五)
山英良鐘 (二六四八)	

『宗派次第』の序文には、「これまで広い範囲で編集した

曹洞宗における宗派図について (駒ヶ嶺)

宗派次第、つまり法系譜類は見たことがない」という旨や、「寛永年中に、總持寺の要請に応じて記録を提出し、總持寺内重んぜられた。その後、永平寺の要請にも応じ、永平寺においても重んぜられた。」という旨が記されている^③。つまり、これまでには見られなかった、広範囲で編集された法系譜類として、總持寺及び永平寺に注目されたことができる。

③ 『三国源流略図列』

安穩寺 (茨城県結城市) 所蔵 一幅 (版本)

『三国源流略図列』は、『解題集』6 関東管区編に収録されている^④。この史料は、貞享四年 (一六八七) に吉祥寺一四世衝天良志が梓行した全二十五段にわたる系図で、過去七仏を頂点に印度、中国、日本 (榮西下、道元下) を記載している。収録人数は、「永平道元」以下に限り一八九名であり、叡山韶碩以下、特に太原宗真以下と通幻寂靈以下を記載している。また、寛永二〇年 (一六四三)、吉祥寺一〇世涼室元清 (一六四八寂) の奥書がある。同様の史料三点が確認される (資料) 参照) ことから、各地に広まっていたと考えられる。下限に示される祖師の示寂年は、少なくとも十七世紀頃まで確認できる。その示寂年を次に示す。

萬極良寿 (一六〇七)	布州東播 (一五七三)
青巖周陽 (一五四二)	

なお、吉祥寺開山青巖周陽は通幻以下の下限に記されている。『宗派次第』の該当箇所は虫食いによる破損の為か、青巖周陽を確認できないが、『洞上宗派図』では確認できる。

④『日域洞上宗派図』

円通寺（岡山県倉敷市）所蔵 一卷一冊
『日域洞上宗派図』は、『解題集』4 中国・四国管区編に収録されている。この史料は、元禄一〇年（一六九七）に編纂された徳翁良高直筆とされる法系図で題簽に「日域洞上宗派図〔開山高和尚自筆〕（一）〔内割注〕とあり、道元禪師以下、およそ二二〇〇人を収録している。全五十六丁で一部欠丁がみられる。『宗派次第』と比較すると、『宗派次第』の範囲内に収まるところが多い。しかし、所によつてはその範囲を超えており、その一つに徳翁自身まで引かれているところがある。『日域洞上宗派図』における徳翁までの記載は、『洞上宗派図』でも確認できる。

⑤『日域宗派図』

西明寺（愛知県豊田市）所蔵 一卷一冊
『日域宗派図』は、『解題集』1 東海管区編に収録されている。表紙には、「日域宗派図 全 西明現住薫補筆」とあり、巻末の識語には「西明什物 月峯補叟 自筆也」とあ

ることから、西明寺一一世月峰薫補（一七〇五寂）による書写本とわかる。全三九丁で、「日域鼻祖永平元大和尚」からはじまる一八六人を収録している。下限の祖師の寂年をみると、十五世紀〜十七世紀頃までの祖師を収録していると考えられる。その示寂年を次に示す。

覚室麟等（二六五九） 大素和尚（二四九七）
林宗和尚（二五二六） 布州東播（二五七三）
門庵宗閑（二六二一） 寿香良達（二五九六）

この法系図は、他の宗派図史料のなかでも、⑦の『日本枝派之図』と収録範囲や広がり方の共通点が多く見られる。なお、下限に西明寺開山である「大素」が記載されている。『宗派次第』、『洞上宗派図』でも該当箇所に「大素」を確認できる。また、この『日域宗派図』は、他の系図には見られない永明寺（山口県津和野市）の世代を記載している。

⑥『日本洞上宗派図』

駒澤大学図書館所蔵 一卷一冊
『日本洞上宗派図』（一七四四跋筆）は、『日本洞上聯燈録』（一七四二刊）を編纂した嶺南秀恕が撰した系図である。全六三丁で、約四八〇〇人を収録しており、近世の洞上で刊行された法系譜では最大の法系図である。ここで用いた駒澤大学図書館所蔵本は、昭和八年に孤峰智瑛氏の所蔵本を小川

靈道氏が謄写したものである。『日本洞上聯燈録』と相互関係にあることが予想される。

⑦『日域洞上宗派正統図』

長国寺（長野県長野市）所蔵 一卷一冊
『日域洞上宗派正統図』は、『曹洞宗報』に報告されているが、ここでは曹洞宗全書刊行会が蒐集し駒沢大学図書館に保管されている複写本を用いた。

この史料は、全五九丁で、「永平道元大和尚」からはじまる三九九四人を収録している。卷末の識語に、「于時延享五戊辰年初春十有五日 能州本山捨持寺中於于妙高庵内寫之者也 信州之沙門〔鐵 鞭 瑞〕謹拜書」（一）内割注」とあることから、延享五年（一七四八）に、總持寺内の妙高庵にて書写されたことがわかる。また、長国寺の開山伝為晃運以下第一一世寧邦運卓までを明記しているが、『宗派次第』、『洞上宗派図』には記載されていないようである。

⑧『日本枝派之図』

普濟寺（静岡県浜松市）所蔵 一卷一帖（折本）
『日本枝派之図』は、『解題集』¹ 東海管区編に『日本曹洞宗派図』の題名で収録されているが、筆者が跋文中の「此日本枝派之圖者諸嶽室中所珍（跡）藏」の一文から判断

曹洞宗における宗派図について（駒ヶ嶺）

しこの題名を用いた。また、この跋文により、原本は諸嶽山總持寺に所蔵されていたことがわかる。

この史料は、「永平道元」から始まり、一七五一人を収録している。跋文より、宝暦八年（一七五八）に大応が天林寺に納めたものであることがわかる。確認できた下限の祖師の寂年より、十七世紀までの祖師を収録していると考えられる。その示寂年を次に示す。

東木長樹（一五二六）	巨海良達（一五九九）
天室正運（二四八九）	心華乘芳（二五一六）
布州東播（二五七三）	桃岳瑞見（二五一八）
唄菴義梵（二四三一）	才翁總藝（二五六九）
覺室麟等（二六五九）	虎室春策（二五九三／一六一三）
門菴宗朔（二六二二）	

天室寿紋（一六五五） 萬失大察（抄）（一六四三）
ところで、普濟寺の開山は寒巖義伊（一一一七〜一三〇〇）だが、『解題集』の解説にもあるとおり、『日本枝派之図』では寒巖までを記載している。『宗派次第』では寒巖を懷舛（一一九八〜一二八〇）の法嗣としており、以下当寺五世である華蔵義曇（一三七五〜一四五五）までを収録する。なお、『洞上宗派図』では寒巖を徹通の法嗣としている。

⑨ 『扶桑洞上略宗派』

駒澤大学図書館忽滑谷文庫所蔵 一卷一冊

『扶桑洞上略宗派』は、全二五丁で、「永平（開山）道元（一）内割注」から始まり、一一九人名を収録している。下限の祖師の寂年は確定できないが、ほぼ『宗派次第』の範囲内である。また、後半部に「寒巖義尹禅師法皇長老」の記述があり、巻末には「穎侍者膳写之」とある。

系図中、源庵守真（寂年未詳）から補筆がみられ、輪王寺（宮城県仙台市）の世代が確認できる。なお、『宗派次第』には輪王寺開山大安梵守（一四八二）、および「穎」つまり本系図の末尾に示された系図（註22参照）にみられる韜岩暎穎につながる珍応正琢（寂年未詳）以下天国泰薫（寂年未詳）まで記載されている。『洞上宗派図』も同様である。

⑩ 『日本曹洞宗之末派』

四天王寺（三重県津市）所蔵 一卷一冊

『日本曹洞宗之末派』は、『解題集』1に収録されている。南龍存舜（一六四四寂）の代に常置されたようで、過去七佛から始まる系譜である。全一五丁で、「永平道元」以下五六七人（補筆含まず）を記載しており、確認できた下限の祖師の示寂年より、少なくとも十七世紀までの祖師を収録していると考えられる。その示寂年を次に示す。

南英謙（慶）宗（一四六〇） 絶芳祖裔（一五〇二）

門菴宗朔（一六二二） 仲翁守邦（一四四五）

器之為播（一四六八） 才應總藝（一五六九）

また、四天王寺の世代について、中興開山正海慈考（一四六六寂）から一七世暉州有暎（一六六〇寂）までを同筆で明記しており、続く一八世悟溪養頓（一六六七寂）、一九世月心文廊（一六七四寂）を小さく補筆している。南龍の寂年が一六四四年であることから、四天王寺の世代に関しては南龍以降に加筆された可能性がある。なお、『宗派次第』の該当箇所において、四天王寺の世代は記載していないが、『洞上宗派図』には記載している。

⑪ 『禅門宗派系譜』

広沢寺（長野県松本市）所蔵 一卷一冊

『禅門宗派系譜』は、『曹洞宗報』（二〇〇五年四月号）で報告されている。中国部、日本部が記載されており、中でも、「日本」永平（開山）道元（一）内割注）を起点とする系図にはおよそ百名ほどの記載が確認できるが、虫食いにより判読、および罫線が不明な箇所もあり、また何紙か欠丁しているようである。しかしながら、下限には、鼎山宗彝（寂年未詳）、得山宗欽（寂年未詳）、安叟宗楞（一三八三〜一四八四）、雲袖宗龍（寂年未詳）などが確認できる。

四 まとめ

各系譜を比較した結果、多数の異同が認められた。各法系図が示す嗣承関係は、所によつては罫線の引き違えも考えられるが、それぞれの宗派図史料が示す当時の主張点とも考えられる個所もあるので、注目したい点である。

二の宗派図についての先行研究のところに示した玉村氏の見解に沿つてまとめると、まず、江戸時代に入り各宗派別の宗派図が選述され始めたことがあげられているが、日本曹洞宗を扱っている宗派図を表にすると、書写年代が判明している史料に限り、確かに十七世紀に入る頃から確認できる。

一寺院に一派が住持するようになったことで、その関係を明示していることについて、『宗派次第』には、開創寺院やその世代数を附した箇所が多数確認できる。これは、竹峰の序に「吾が宗諸山に到る毎に、門派次第と嗣法兄弟とを尋ね」とあるので、寺院世代の可能性もあるが、いわゆる人法、伽藍法どちらを示しているのかは判断が及ばない。

「宗派図の編者は、本山局の依頼または命令によつて編纂する場合が多かった」については、竹峰が永平寺に縁の深い人物であり、總持寺、永平寺の要請を受け納めていることから、当てはまるようにも考えられる。しかし、本山が納めさせた目的が対幕府の政策にあったかどうかは、ここではまだ

判断できない。また、『宗派次第』、『洞上宗派図』に限り比較した場合、四天王寺所蔵『日本曹洞宗之末派』、長国寺所蔵『日域洞上宗派正統図』のように、各開山および寺院の世代を系図に位置付けている様にもみえ、系図を編纂および書写する際に、寺院の世代を位置付けることで完成させていくという傾向も考えられる。

【資料】にも示したように、まだ未検討の系譜が多数ある。また、報告されていない史料の存在も考えられる。よつて、確定的なことはいえないまでも本検討を通して、宗派図の内容や傾向などを少しは確認できたように思う。また、この研究を通して派生的に気がついたことがある。それは、「はじめに」でも述べたが、十七世紀頃の系譜には、「宗派」「派」という漢字が使われていることである。この時代の「宗派」の語句は、師を源とし、師資及び兄弟の嗣承関係が支流の如く、枝葉の如く広がる様子を示していたようである。

※本稿にあたって用いた史料は、曹洞宗文化財調査委員会所蔵の複製本、駒澤大学図書館所蔵の複製本、屋島町文化財事務所所蔵の複製本を用いた。貴重な史料の閲覧・複写をお許しいただいた毛呂大和様、長興寺様、安穩寺様、円通寺様、西明寺様、長国寺様、普濟寺様、四天王寺様、広沢寺様に厚く御礼申し上げます。

曹洞宗における宗派図について（駒ヶ嶺）

【資料】 日本曹洞法系譜

* 刊写の空欄は未詳もしくは未確認。また、刊写年は序文、識語等より判断した。なお後代の書写であっても撰編者、筆者者が判明している場合はそれを優先した。

	史料名	刊写	撰編者／筆写者	刊写年	所蔵	備考
1	『(宗門之略宗派図)』	写	才翁總藝	(中世)	長野長興寺	中国より日本へ無極派を示し、快叟が下限。元龜二年(一五七二) 圭嶽珠白が長興寺に常置し、元禄九年(一六九六) 体岩栢全の代に改修。
2	『(禅門宗派系譜)』	写		(中世)	長野広沢寺	
3	『(三國源流略図列)』	木版 軸装	涼室元清カ	寛永二〇年 (一六四三)	茨城安穩寺	貞享四年(一六八七) に吉祥寺一四世衝天良志(一六九二寂) が梓行したものの
4	『(三國源流略列図)』	木版 軸装	涼室元清カ	寛永二〇年 (一六四三)	埼玉広見寺	貞享四年(一六八七) に吉祥寺一四世衝天良志(一六九二寂) が梓行したものの
5	『(三國源流略列図)』	木版 軸装	涼室元清カ	寛永二〇年 (一六四三)	大阪大広寺	貞享四年(一六八七) に吉祥寺一四世衝天良志(一六九二寂) が梓行したものの
6	『達磨大師宗派次第』	写	竹峰広嫩	寛永年間	群馬毛呂大和氏	毛呂権蔵(一七二四～一七九二) による謄写本
7	『(法系図)』	写			愛知妙厳寺	識語に、一翁伝甫(一六四二寂) 書とある。
8	『日本曹洞之末派』	写	声隠齊	(近世初期カ)	三重四天王寺	四天王寺一六世南龍存舜(一六四四寂) の代に常置。一七世暁州有暎(一六六〇寂) であり。天保九年(一八三九) に三九世廓道石心(一八四八) が補修。
9	『五宗源流図』	写	心越興傳	康熙九年 (一六七〇)	茨城祇園寺	曹洞・雲門・法眼・臨濟・滄仰各宗の法系譜
10	『(日域洞上宗派図)』	写	徳翁良高	元禄十年 (一六九七)	岡山巴通寺	『達磨大師宗派次第』「諸山ノ雜記」を参照している
11	『(源流宗派図)』	写	徳翁良高		岡山巴通寺	元禄癸未(一七〇三) の巴山道白の識語あり。次の12と同一カ
12	『略宗派図』	写				徳翁良高編纂のものとする。『巴山広録』三四に記述あり。
13	『日域宗派図』	写		宝永二年 (一七〇五) 以前の写	愛知西明寺	

14	『日本洞上宗派図』	刊	嶺南秀恕	延享元年（一七四四）跋文筆（この年刊行カ）	松ヶ岡、補陀寺、孤峰、駒大（孤峰智環所藏、小川壺道写）	『達磨大師宗派次第』『續傳燈錄』『普燈錄』『五燈會元』『石門文字禪』『五燈會元統略』『歸藏采逸集』『増集續傳燈』『古篆宗派図（仏祖宗派図）』『延寶傳燈録』『續諸祖伝』『洞谷記』『総持住山記』『洞上諸祖伝』『扶桑僧實傳』『承現寺行状記』『茂林寺系譜』『長年寺記』『曇英和尚行状記』『重續諸祖伝』『越州慈眼住山記』『一庭融頓嗣書』を参照資料にあげている。
15	『（禅宗祖師系図）』			享保一九年（一七三四）	栃木大中寺	菩提達磨く中国く日本禅宗祖師の法系譜
16	『三国源流図』		涼室元清	延享二年（一七四五）以前の成立		
17	『三国伝灯略図解』		扶木叟某	延享二年（一七四五）		元清撰『三国源流図』を補ったもの
18	『日域洞上宗派正統図』	写	鐵ノ鞭ノ端	延享五年（一七四八）	長野長国寺	総持寺中妙高庵で書写
19	『扶桑洞上略宗派』	写	韜岩噉穎	寛延四年（一七五二）	駒大忽滑谷文庫	「寒巖義尹禪師法皇長老」の記述あり。
20	『三国相承宗分統系譜』	木版 軸装	東嶺円慈（田原甚兵衛・小川源兵衛刊行）	宝暦八年（一七五八）	補陀寺 鳥取大岳院	三国相承の系譜で下限は日本の近世期まで。東嶺円慈（一七二一〜九二）は、白隠慧鶴（一六八五〜一七六四）の弟子
21	『日本枝派之図』 （『日本洞上支派之図』 ／『日本洞上伝灯寺譜』 ／『日本曹洞宗派図』）	写	大応	宝暦八年（一七五八）	静岡普濟寺	原本は古来より總持寺室中に襲藏されているらしい。大応が、宝暦八年に普濟寺末寺天林寺に収めた。
22	『鷹峰聯燈系譜』	版本	己海宗珊	宝暦一三年（一七六三）	駒大図	
23	『国朝二十四流稽疑』		智顔白逢	明和元年（一七六四）	駒大図	
24	『仏祖宗派図』		少津貫重	文化二年（一八〇五）		

曹洞宗における宗派図について（駒ヶ嶺）

25	『泉福源灯録』	写				肥後泉福寺	天保七年（一八三六）本
26	『無著門下略系譜』	木版	知嗣妙田	天保五年 （一八三八）	大分清水寺	軸裏に明治三三年八月表装の奥書あり	
27	『弘化系譜伝』	刊	知嗣妙田	嘉永二年 （一八四九）	駒大図書館	『泉福源灯録』の増補	
28	『五家宗派略図』			近世写	島根清光院	六祖慧能以下、五家七宗、日本伝来の各派の祖師に至る系譜で、洞門の下限は東阜心越（一六三九〜九六）	
29	『洞上法系譜』	写		近世初期頃	千葉総寧寺	通幻派下近世初期頃までを示す	
30	『本朝曹洞略宗派図』		黙隠	江戸期末	群馬補陀寺	黙隠は黙隠祖价（一六八一寂）カ	
31	『扶桑伝灯』				群馬補陀寺		
32	『宗派図』				山梨慈照寺		
33	『日域曹洞略宗派図』					寒巖義伊を懐驛の直嗣としている。	
34	『伝東略録』						
35	『天真派血脈』	写			長野広沢寺		
36	『天真派下宗派』				長野龍勝寺		
37	『最乗寺輪番宗派図』				茨城円通寺	道元〜了庵慧明までの系譜	
38	『法系譜』				茨城円通寺	上部欠〜太源宗真〜通幻寂靈派下の系図	
39	『禅宗法脈図』				群馬雙林寺	達磨〜清洞二宗を示す	
40	『曹溪分派図』				山梨長生寺	中国五家宗派略図及び巖山派下を示す	
41	『仏祖宗派図』	木版			山梨広厳院	五家宗派図	
42	『法王派系譜』				山梨宝鏡寺	道元〜寒巖派下を示す	

43	『月泉良印門下法徒系譜』			亥三月	埼玉広見寺	月泉良印の法嗣二四哲を示す
44	『(太源派・通幻派法系図)』				埼玉正龍寺	道元禪師→太源・通幻派下→律州慧範・鉄心御州
45	『(法系譜)』				埼玉鳳林寺	徳翁良高派下を示す
46	『(通幻寂霊門下系譜)』				埼玉広見寺	通幻寂霊、了庵慧明、大綱明宗、無極慧徹の派下の系図
47	『法王派系譜』	写	済門隠士		愛知妙厳寺	
48	『曹洞宗法脈系譜』				曹洞宗古文書収録	天重如淨以下初期日本曹洞宗一六名の付法相承図
49	『補巖寺開山支派』				奈良補巖寺	了堂真覚門法の法系図
50	『本朝伝法宗派図』	木版			滋賀洞寿院	禪門二四流四六伝の法系図
1	『洞上法系大鑑』	刊	斉藤道知編	一九二三年次城		
2	『曹洞宗大系譜』	刊	大久保道舟編	一九三四年 仏教社		調査用紙およそ三千通、各種史料
3	『曹洞宗全書大系譜』	刊	曹洞宗全書刊行会	一九七六年 曹洞宗全書刊行会		全国曹洞宗寺院の世代調査表(一万二千五百二十六ヶ寺分)回収率85%、嗣承調査表(一万二千四百九十八枚)、昭和九年(一九三四)刊行『曹洞宗全書系譜』、各種史伝、系譜、曹洞宗蔭所管の寺籍簿、僧籍台帳
4	『禅学大辞典』付録 (禅宗法系譜)	刊	禅学大辞典編纂所	一九七八年		参考文献は各種史伝、系譜など多数にのぼる。凡例にあげられている。

明治以降の系譜

註

- (1) 原昭英氏は「禅戒血脈と栄西」で、法系図の類型を「単線型」「末広がり方」「合流型」に分類している。
- (2) 拙稿「徳翁良高編『日域洞上宗派図』について」（『宗学研究』第四十六号 二〇〇四）で、史料紹介、編纂背景と目的の考察をおこなった。
- (3) 拙稿「竹峰広嫩撰『達磨大師宗派次第』について」（『印度学仏教学研究』第五十三卷第一号 二〇〇四）で、毛呂権蔵（一七二四〜九二）の謄写本であることを紹介した。
- (4) 前注(2)「徳翁良高編『日域洞上宗派図』について」で跋文を紹介し、「余欲造此図先閲越之勝山嫩竹峰所集草本」を示した。また同稿の中で、嶺南秀恕編『日本洞上宗派図』跋文中の「寛永間越之義宣寺竹峰 公始造永平祖派図」を示した。
- (5) 大久保道舟氏は、「曹洞宗大系譜の編輯を終へて」（『曹洞宗全書』会報第十二号（一九三四年五月））の中で、「曹洞宗大系譜」の編纂過程を、「自分はこの調査の為に、大凡六千通の用紙を数回に亘って、全国寺院に配布し、その答を求めたのであるが、最初は僅々二三百通の返信を受けたに過ぎなかった。然るに暫次自分の事業が一般に理解されるに至って、報告は続々増加し、最後には終に三千通の多きに達した。そこで、昨昭和八年八月までを締め切りとして、全部の整理を了り、愈々印刷に着手することとなったのであるが、この系譜の組方はまた特別の
- 技術を要するといふので、仕事の中々捗らない、その上に、人名索引の作製に意外の手間を取ったので、終に今日まで延引したのである。」と述べている。
- (6) 『解題集』等で、世代が確認できる寺院。
- (7) 『宗門之略宗派』（『曹洞宗報』平成一〇年八月号）の解説には、「才応総芸編〔中世〕 表題・内題なし。寛政八年（一七六九）の校割帳に「略宗派一卷」とあるのが本系譜であろう。西天・東土・日域の禅門系譜であるが、中国は五家に分け日本は曹洞以下の無極派快叟を下限とする。巻末の識語により編成の経緯が知られる。元龜二年（一五七二）五月に二世圭嶽が長興寺に常置し、元禄九年（一六九六）一一世体岩柏全代に改修した。この際に折本としたのであろう。」とある。長興寺の世代寂年については、二〇〇五年度刊行予定の『解題集』7を参照のこと。
- (8) 圭嶽は圭嶽珠白のこと。長興寺二世。
- (9) 竹峰広嫩については、『駒澤大学大学院仏教学研究會年報』第三十九号（二〇〇六）に掲載予定
- (10) 前注(3)「竹峰広嫩撰『達磨大師宗派次第』について」で、序分の一部を挙げ、「未見有廣編」と「于時寛永年中、人口、傳之能州諸嶽山。忝以一山衆評乞令予紹編之。我不獲默止、雖然未尽其邊際、先者為應總持尊命、次者於後代為作門派標的、畧聯續記軸而以掛惣持室中床壁也。其後又應永平堂上之尊望、於

吉祥山、撰豎横之兩編、豎編者軸而掛之室中床壁、横編者札而納之文庫也。」(説点は筆者による)をとりあげている。

(11) 『三國源流略図列』(『解題集』6 関東管区編)の解説には、「貞享四年(一六八七)秋、良志刊行、江戸吉祥寺一四世衝天良志が刊行したもので、それ以前の寛永二〇年(一六四三)秋に吉祥寺一〇世涼室元清が奥書を選述している。」とある。

(12) 『日域洞上宗派図』(『解題集』4 中国・四国管区編)の解説には、「徳翁良高編 元禄一〇年自筆 永平道元より近世初期の尊宿に至る日本曹洞宗の法系譜。元禄一〇年に徳翁がみずから自書した跋文によれば、本書はまず越前勝山嫩竹峰の集めた草本を閲し、次に諸山の雜記を求め、撈漉してこれを成した、と述べている。なお元禄一〇年は徳翁が大乗寺を退席して備中韮光庵に居た時に当たる。」とある。

(13) 『日域宗派図』(『解題集』1 東海管区編)の解説には、「宝永二年前写 月峰薫補筆 日域曹洞の鼻祖道元禪師よりその派下の系譜、大乘三世明峰素哲派、總持二代峯山二十五哲、如仲十二派、太源派下丁堂真覚派、峯山派下無外円照派・通幻寂靈派十哲、月江派下一州正伊四派・密山正嚴派、了庵派下大綱明宗十二派、春屋派下即庵宗覚派その他各派下の系譜を图示したもの。因みに明峰派下に『加州祇陀開山法子出二十一、大智祖繼』と表記があり、江戸前期〜中期に大智の諱号の呼称事実を知らしめられ、諱号をめぐる是非の問題に説明の手がかりを

与える。月峰薫補は西明寺一一世」とある。

(14) 近世洞門研究班『日本洞上聯燈録』の研究(一)、『駒澤大
学禅研究所年報』第十五号 二〇〇四 中、拙稿『日本洞上宗
派図』の性格」でふれている。

(15) 『日域洞上宗派正統図』(『曹洞宗報』二〇〇四年7月号)の解説には、「延享五年(一七四八)写 道元禪師以下、曹洞宗祖師の法系図で近世中期ごろまでが記載されている。長国寺は開山以下第一一世寧邦運卓までの記載である。延享五年正月一日、總持寺妙高庵で信州の沙門鐵・鞭・瑞三者による書写である。」とある。

(16) 鐵、鞭、瑞の三者については未詳。

(17) 伝為晃運、寧邦運卓の寂年は、二〇〇五年度刊行予定の『解題集』7を参照のこと。

(18) 『日本曹洞宗派図』(『解題集』1 東海管区編)の解説には、「筆者未詳。外題は、「宗派図」。道元禪師以下、日本曹洞宗の法系譜で、原則として道号・法諱の四字連のみを線で繋ぎ、折本仕立てとした系図。かなりの分量であるが、その下限は中世室町期で終わるから成立は古く、従来未知の者も少なくない。なお、寒巖法皇を永平道元下としながら、以下の系譜を欠くから、編者は寒巖派以外の者か。巻末にみえる、幕末の大応による識語により、本帳が總持寺に秘在していたことが知られる。」とある。

(19) 『日本枝派之図』の跋文 ■——不明文字 読点は筆者による

此日本枝派之圖者、諸嶽室中所珍（跡）藏、○永平門下瓜瓞孫々而明矣。然季世至于系譜之錯乱者、明以此圖為霧海南針挾途北斗乎。只諸方以寒巖尹公、属徹通之嗣、予不分真偽。若有歲寶曆戊寅冬、遠之普濟派下寓天林精舍之于出、■山主承玄公茗談。已及斯玄公云、我普濟門下十三派見取的々相承之嗣書。故普濟門之以尹公則○元祖嗣是以為證。予於是雙然、與此圖見、只符節則尹公者為○元祖之上足可注碧落之碑無贗本矣。因不廟禿毫傍書写之、納天林室内而兼当山主玄公交情之萬之可。

羽陽沙門大應□誌之

*宝曆八年（一七五八） *羽陽（山形） *山主承玄：天林寺（静岡県浜松市）一八世大興承玄（一七八九寂）と、同一人物と思われる。

(20) 大応は未詳。

(21) 『日本枝派之図』について、大久保氏は『曹洞宗全書』会報第十二号の中で、『日本洞上枝派之図』一卷 一名『日本洞上伝灯寺譜』とも称し現今遠江普濟寺に伝っている。宝曆八年の冬羽陽の沙門大応が同寺末寺天林寺に納めたものである。その動機は、大徹が天林寺に寓し、時の山主承玄と法談を交えた時、談遇遇寒巖禪師の嗣承論に及んだ。此の時玄承は、普濟寺門下十三派にては、寒巖を永祖の直嗣と為し、その嗣書を嫡嫡想相

承している旨を語った。此時大応は、承玄の云ったことが、自分の所蔵している此の枝派の図と合致しているので大に喜び、早速一本を模写して納めたものがこの図である。大応の奥書によると其の原本は古来より總持寺の室中に襲藏せられていたということである。この事は栗山泰音氏の『嶽山史論』にも述べられている。但し嶽山史の方では『日本曹洞宗派図』という題になっている。大応は恐らく總持寺の原本から騰写したものである。猶、此の普濟寺本の末尾には『永平三代相論』と題し其の顛末が記されているが、それも普濟寺開基華藏義曇の永平寺再中興を讃揚せんが為に書かれたものである。」と述べている。

(22) 系図の末尾に珍応正琢（寂年未詳）以下が示されており、その末尾に「栢岩獨丕（宮城輪王寺二三世、一七五七寂）——大嶺不白（同二四世、一七六八寂）——韞岩暎穎（同二六世、一七九二寂）」（一）内筆者」とあることから、韞岩暎英と推察する。「声應齋編 江戸初期写 四天王寺一六世の南龍存舜の代に常置した日本曹洞宗の嗣承系譜。西天・東土の伝灯祖師を経て、日本曹洞宗の明峰派・太原派・通幻派・石屋派・普濟派・天真派の順に記載されている。とりわけ、四天王寺歴住者の属する普濟の記録が詳細であり、南龍の法嗣で同寺一七世の暉州有暎までが同筆、以下若干の補筆がみられている。天保九年（一八三八）に三九世の廓道石心が修補している。」とある。

(24) 龍泉寺(福井県武生市)所蔵資料に、『大平山龍泉寺前任帳』一卷一冊があり、『曹洞宗報』(一九八九年一月号、二〇〇五年二月号)の「宗宝調査委員会調査目録及び開題」に報告されている。その解説によれば、「南龍存舜編、寛永一九年(一六四二)写 内題に『索阿世界南舜部州北陸道之前州路丹生郡巖永保大平山龍泉禅寺前任帳』とあり、三重県津市の四天王寺一二世南龍存舜が龍泉寺開山通幻寂霊以来、この寺の輪住世代の名を年順に列記した前任帳である。ちなみに、寛永十九年の輪住者は南龍で二四八世になる。なお、以下享保二年(一七一七)に第三二三世の量外派欠住の記事までが書き継がれている。」とあることから、南龍は、晩年に龍泉寺に輪住していたことがわかる。龍泉寺は、總持寺の直末である。

(25) 表紙に「塔山十六世南竜和尚置之 日本曹洞之末派 三十九世石心修補 皆天保九戊戌夏安居」、とあることから、天保九年(一八三八)に同寺三九世廓道石心(一八四八寂)が補修していることが分かるが、一丁表に「勢州塔世山四天王十六世 南龍舜叟置之 日本曹洞之末派 声隠齋「花押」と、「声隠齋」(未詳)の名もあるので、南龍より後、廓道以前に加筆された可能性がある。

(26) 『「禅門宗派系譜」』(『曹洞宗報』二〇〇五年四月)の改題には、「[中世]写 表紙を欠き、本文首尾が破損のため、題名・年代・筆者などは不明。しかも欠丁が少なくない。内容は中国禅宗

と日本曹洞宗の系譜であり、まず中国の曹洞宗、ついで日本曹洞宗そして中国の曹洞宗以外の五家七宗、という順になっている。日本曹洞宗は末尾が欠丁のため速断はできないが、現存する部分の祖師名で下限は室町末期である。したがって本系譜の編集・書写は中世末期と見てよいであろう」とある。